博士前期課程芸術専攻
修士論文梗概集 2021

The Synopses of Master's Theses, Master's Program in Art and Design

筑波大学大学院人間総合科学研究科
Master's Program in Art and Design,
Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
University of Tsukuba

Master's Program in Art and Design,
Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
University of Tsukuba

Fine Art

History of Art

Art Environment Support

Western Style Painting

Nihonga (Japanese Style Painting)

Carving & Modeling

Sho-Calligraphy Art

Design

Constructive Art

Plastic Art & Mixed Media

Craft

Visual Design

Information Design

Product Design

Environmental Design

Architectural Design

筑波大学
University of Tsukuba

序
Foreword

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻長　仏山 輝美
Professor HOTOKEYAMA Terumi, The Chair of Master's Program in Art and Design, University of Tsukuba

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻は、昭和52年に開設された筑波大学大学院修士課程芸術研究科を前身とする総合大学に所属する教育課程です。遡れば東京教育大学教育学部教育学専攻科芸術専攻、さらに明治32年の東京高等師範学校手工専修科におけるわが国最初の西欧式芸術教育課程にその源流を求めることができ、常に時代に先駆けた教育内容を取り入れ、国内外の教育界で先導的な役割を果たしてきた実績があります。

筑波大学の建学の理念に「変動する現代社会に不断に対応しつつ、国際性豊かにして、かつ、多様性と柔軟性とを持った新しい教育・研究の機能及び運営の組織を開発する」とあります。本専攻では、この理念の下、芸術における専門性の深化のみならず、幅広い教養、人間力を身に着ける教育課程が編成されています。

このたび、博士前期課程芸術専攻では、第15期の修了生として修士（芸術学）4名、修士（デザイン学）4名、のべ8名の学位取得者を世に送り出すこととなりました。本書には、研究成果の概要が収められています。修了生にとっては、今後の活動を進める上での基軸となる記念碑的な研究成果であります。どうかご高配を賜り、忌憚のないご批評ご教示をお願い申し上げます。

目次
Contents

芸術学領域群
Fine Arts

美術史
Art History

常包 美穂 TSUNEKANE Miho	英泉、広重画「木曽海道六拾九次之内」再考―摺刷技法と表現意図をめぐって― Reconsideration of “The Sixty-Nine Stations of the Kisokaido” by Eisen and Hiroshige: Focusing on Printing Technique and Expression	02

洋画
Western Style Painting

有賀 睦 ARUGA Mutsumi	ジャン・ジャンセンの絵画に関する一考察 A study on the paintings by Jan Jansem	04

日本画
Nihonga (Japanese Style Painting)

宮本 苑佳 MIYAMOTO Sonoka	色彩の心理効果に関する研究　作品「色の存在」「怠け者」「自画像」及び研究報告書 A study on the psychological effects of color Work “The Existence of Color” “The Sloth” “Self-portrait” with Research Paper	06

彫塑
Carving & Modeling

最上 健 MOGAMI Ken	長谷川昂の木彫作品における鉈彫技法による造形に関する研究　作品「進化と朽滅」及び研究報告書 A study of the formative technique by hatchet in Hasegawa Ko’s wooden sculptures　Work: “Evolution and decay” with Research Paper	08

デザイン学領域群
Design

ビジュアルデザイン
Visual Design

小山 莉瑛子 KOYAMA Rieko	グラフィックデザイナーの自主制作によるカルチャーメディア　作品「Hinagiku」及び研究報告書 Culture media by graphic designer’s private work　Work “Hinagiku” with Research Paper	12
中峯 大樹 NAKAMINE Daiki	ジャン・ミシェル・フォロンのポスター作品に見られる詩的表現の研究　作品「絵はうたへ うたは絵へ」及び研究報告書 Study of poetic expression of Jean-Michel Folon’s poster work　Work “Illustrations become poems, poems become illustrations” with Research Report	14

建築デザイン
Architectural Design

菅野 優樹 KANNO Yuki	分譲マンションの管理体制が中古取引の価格構造に与える影響に関する研究　―不動産データの回帰分析に基づいて― Research on the impact of the condominium management system on the price structure of pre-owned transactions –Based on regression analysis of real estate data–	16
張 瀾 ZHANG Lan	都市公園におけるドッグラン建築に関する設計手法 作品「犬と生きる教育・交流センター」、「まちのわんわん休憩ホーム」、「ミナト犬の交流広場」及び研究報告書	

令和3年度受賞作品・論文一覧
List of Awarded Works / Theses, 2021

作品の部
Art and Design Works

筑波大学芸術賞
Grand Prize for Outstanding Achievement in the Graduate School of Art and Design

有賀 睦 ARUGA Mutsumi	眼差しa A gaze (a)	眼差しb A gaze (b)	洋画（版画） Western Style Painting (Printmaking)

茗渓会賞
Alumni Association's Prize for Achievement in the Graduate School of Art and Design

最上 健 MOGAMI Ken	進化と朽滅 Evolution and decay	彫塑 Carving & Modeling

芸術専攻優秀作品賞
Merit for Excellent Achievement in the Graduate School of Art and Design

小山 莉瑛子 KOYAMA Rieko	Hinagiku	ビジュアルデザイン Visual Design

論文の部
Academic Papers

筑波大学芸術賞
Grand Prize for Outstanding Achievement in the Graduate School of Art and Design

常包 美穂 TSUNEKANE Miho	英泉、広重画「木曽海道六拾九次之内」再考 ―摺刷技法と表現意図をめぐって― Reconsideration of "The Sixty-Nine Stations of the Kisokaido" by Eisen and Hiroshige: Focusing on Printing Technique and Expression	美術史 Art History

芸術専攻優秀論文賞
Merit for Excellent Achievement in the Graduate School of Art and Design

菅野 優樹 KANNO Yuki	分譲マンションの管理体制が中古取引の価格構造に与える影響に関する研究 ―不動産データの回帰分析に基づいて― Research on the impact of the condominium management system on the price structure of pre-owned transactions –Based on regression analysis of real estate data–	建築デザイン Architectural Design

芸術学領域群

Fine Art

Art History	美術史
Art Environment Support	芸術支援
Western Style Painting	洋画
Nihonga (Japanese Style Painting)	日本画
Carving & Modeling	彫塑
Sho-Calligraphy Art	書

常包 美穂
TSUNEKANE Miho

英泉、広重画「木曽海道六拾九次之内」再考―摺刷技法と表現意図をめぐって―

Reconsideration of “The Sixty-Nine Stations of the Kisokaido” by Eisen and Hiroshige: Focusing on Printing Technique and Expression

芸術学領域群 美術史領域

溪斎英泉（1791-1848）と歌川広重（1797-1858）の作画による「木曽海道六拾九次之内」は、起点日本橋と中山道の各宿場を描いた全70図（「中津川」の異版を含めると71図）からなる大判錦絵揃物である。英泉と保永堂（竹内孫八）により天保6年（1835）から出版が開始されるも、英泉が24図を描いた後、同7年以降に広重と錦樹堂（伊勢屋利兵衛）へ引き継がれた。広重が描いた47図は、落款書体の違いにより作画時期を第1群26図と第2群21図に区別できる。

本稿は、特殊な出版経緯を中心とする先行研究とは異なり、本作の摺刷技法に注目した。そして、錦樹堂版におけるぼかし摺の増減と他作品からの版木の転用を指摘し、商業主義的な制作環境下における絵師の表現意図と版元の出版意図を考察した。また、様式上の特徴と版元の出版業から、本作の完結年を再検討した。以上により、19世紀の浮世絵出版における本作の位置づけを目的とした。

第1章では、本作の作画について論じた。起筆から24図を担当した英泉は、宿場順ではなく、特徴的な名所や風俗のある宿場を優先的に描いたと推測される。透視図法を取り入れた構図と、筆の勢いを忠実に版刻させた緻密な描線や、墨をにじませたような遠景表現が特徴である。英泉は、文化（1804-18）末期から天保（1830-44）初期にかけて、洋風画を意識した作品を集中的に描いていた。さらに、天保4年頃に著した『無名翁随筆』（続浮世絵類考）において、葛飾北斎（1760-1849）の漢画表現を取り入れた画風を高く評価しており、本作にも北斎からの影響が指摘されている。本作は、木版画において肉筆山水画のような趣を表現することを目指した英泉による、洋風画を消化した自然な遠近感と、北斎画や画譜類を通した漢画学習の融合と位置付けることができる。また、美人画で評価を得たこともあり、遊女などの画中人物を比較的大きく描く傾向にある。人物画を得意とする自身の長所を生かしつつ、多様な絵画技法の習得を示す意図が読み取れる。

作画を引き継いだ広重による47図は、おおよそ宿場順に描かれている。第1群26図は、上野国から美濃国にかけての標高の高い難路を中心としている。特定の季節や気候、時間帯を表した多彩な自然描写が特徴である。また、山間の道中を描いた図が多く、地形を大胆に抽象化した面的な表現が目立つ。第1群は、描かれている宿場や場所の説明よりも、険峻な木曽路の象徴としての山間風景の描出が重視されている。

しかし、美濃国以降の比較的平坦な道程を描く広重第2群21図では、作画姿勢が大きく変化する。まず、水平線や地平線を中心とした、透視図法を用いた自然な遠近感による、やや高い視点からの平板な構図へと変化する。これは、「東海道五拾三次之内」（保永堂版、天保4～7年頃）以降の特徴として先行研究で指摘されており、画風の変化が要因と考えられる。また、榜示杭や見付などを画中に取り入れることで、描かれた場所の推測が容易となっている。さらに、雨、雪、月の図が少なくなり、春から夏の晴景が多くを占める。第2群では、宿場や景観の情報を平明に説明することを重視しており、季節や天候、時間帯を限定せずに購入や鑑賞が可能な作品を意図している。

第2章では、本作の摺刷技法について論じた。まず、稲垣進一氏やアンドレアス・マークス氏による先行研究を基に、レスコヴィッチコレクションや中山道広重美術館を含む11館の所蔵図から本作の初摺に近い作例の検討を行った。その結果、初摺から後摺にかけて、主に、色、ぼかし摺、版（図柄）に省略や変更が見られることが分かった。

英泉画24図は、ぼかし摺も用いられるものの、山頂部分などは描線や陰影によって険しさを表現している。筆の動きを忠実に版刻した緻密な彫りも、英泉作品の特徴である。また、中山道広重美術館が所蔵する本作のうち、保永堂が出版に関わる5図に雲母摺が確認できた。主に英泉画の出版を担当した保永堂は、「東海道五拾三次之内」（保永堂版）に続く成功を期待して、木版技法を惜しまず手の込んだ作品を意図したと考えられる。

絵師の交代と同時期に錦樹堂が出版に参加しており、保永堂と共版を行った後、完全に版権を譲り受けている。錦樹堂の出版図には、摺りにおける特徴的な試みが指摘できる。

まず、英泉画後摺のうち、広重第1群作画時期に出版されたと考えられる「本庄」、「追分」、「奈良井」、「薮原」の4図に山頂へのぼかし摺が追加されている（図1-2）。英泉はぼかし摺よりも描線や陰影を用いる傾向にあることを先述したが、隆起した地形へのぼかし摺は本作第1群を含む広重作品の特徴である。英泉の落款が削除され、本来の絵師が特定しづらい後摺において、錦樹堂が表現を広重に寄せて出版した可能性が考えられる。

しかし、同じ絵師と版元による同一シリーズの出版にも関わらず、第2群では、ぼかし摺が平均5ヵ所から平均3ヵ所に減少する（図5-6）。構図とぼかし摺には多少の関連性があるものの、第2群においては起伏した地形にもぼかし摺が施されなくなる。こうした凸部分へのぼかし摺は本作以降にも見られる広重風景画の特徴であるため、構図や画風とは異なる意図で摺りが変化したと考えられる。ぼかし摺の減少は、色版の枚数や摺りの手数の省略に繋がる。第2群においては、版元の意向により、出版に要する経費もしくは時間を削減したために、ぼかし摺を減少することになった可能性がある。錦樹堂は、広重第1群出版時点では手数を惜しまずに質の高い風景版画を意図していたものの、第2群ではより安価に出版する方針へ転向したと見なすことができる。

第3章では、本作の完結年を再検討した。制作年については、落款書体と画風を典拠とする内田實氏説が1980年代まで踏襲されてきた。現在では、広重「江戸高名会亭　雑司ケ谷之図」を典拠とする落款書体の変化期と、千葉市立郷土博物館旧蔵「大津」の裏打ち紙への書き込みから、英泉画を天保6～7年頃、広重第1群を天保7～8年頃、第2群を天保8～9年頃の作画とする浅野秀剛氏説が有力視されている。

広重第1群の出版時期に関しては、「高祖御一代略図」が手掛かりとなる。第1群作画時期に出版された広重「大井」（図5）と英泉「追分」後摺（図2）には、同じく錦樹堂より出版された歌川国芳「高祖御一代略図」10図のうち、「佐州塚原雪中」（図4）と「文永八鎌倉霊山ヶ崎雨祈」（図3）から胡粉と雨脚の版木を転用していることが指摘できるのである。版木の制作を節約しつつ表現の幅を広げようと試みる、版元の試行錯誤が表れている。

国芳の落款書体から、「佐州塚原雪中」は天保5～6年、「文永八鎌倉霊山ヶ崎雨祈」は天保7年以降の出版である。「文永八鎌倉霊山ヶ崎雨祈」の出版を天保7年とし、胡粉のある「大井」や、雨脚のある「追分」の後摺を天保8年の出版と考えれば、浅野氏説とは矛盾しない。

しかし、浅野氏説において完結年の典拠となっている裏打ち紙への書き込みは、明治6年から同22年（1873-89）の間に書かれたものであり、やや信ぴょう性に欠ける。また、広重第2群は重版に伴う摺りの変化が少ないことから、比較的早い時期に出版を終了したと考えられる。本稿では、天保末期にかけて広重の構図が変化し、錦樹堂の出版業が縮小傾向になることから、第2群の作画および完結年を天保10～11年頃と推察した。

本作は、北斎「冨嶽三十六景」（天保初期頃／1830-34）や広重「東海道五拾三次之内」（保永堂版）から続く、風景画出版興隆の中で制作された。さらに、浮世絵出版史上において、中山道の各宿場を主題とする唯一の錦絵風景画であり、天保期最大規模の揃物であった。そのため、長期的な作画および出版の中で、版元や絵師の交代や構図の変化、ぼかし摺の増減など紆余曲折を経ることとなった。しかし、企画を打ち切ることなく完結まで至ったことには大きな意義があった。本作は、完結後も嘉永元年（1848）以降に錦橋堂（山田屋庄次郎）から再版されており、長きにわたり中山道の旅情への需要に応えたのである。

図1
溪斎英泉
「木曽街道　追分宿　浅間山眺望」（初摺）
大判錦絵　保永堂
天保6～7年頃（1835-36）　中山道広重美術館
図版典拠：福田訓子編『歌川広重・溪斎英泉　木曽海道六拾九次之内（増補版）』中山道広重美術館、2013年、48頁、図20-1

図2
無款（溪斎英泉）
「木曽街道　追分宿　浅間山眺望」（後摺）
大判錦絵　錦樹堂
天保7年（1836）以降　東京国立博物館
図版典拠：東京国立博物館画像検索（https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0020904）

図3
歌川国芳
「高祖御一代略図　文永八鎌倉霊山ヶ崎雨祈」
大判錦絵　錦樹堂
天保7年（1836）以降　大英博物館
図版典拠：大英博物館所蔵品検索（https://www.britishmuseum.org/collection/image/587312001）

図4
歌川国芳
「高祖御一代略図　佐州塚原雪中」
大判錦絵　錦樹堂
天保5～6年（1834-35）　ボストン美術館
図版典拠：ボストン美術館所蔵品検索（https://collections.mfa.org/download/235790）

図5
歌川広重
「木曽海道六拾九次之内　大井」（第1群）
大判錦絵　錦樹堂
天保7～8年（1836-37）頃　中山道広重美術館
図版典拠：前掲図1に同じ、96頁、図46-1

図6
歌川広重
「木曽海道六拾九次之内　細久手」（第2群）
大判錦絵　錦樹堂
天保8年（1837）以降　中山道広重美術館
図版典拠：前掲図1に同じ、100頁、図48-1

有賀 睦
ARUGA Mutsumi

ジャン・ジャンセンの絵画に関する一考察

A study on the paintings by Jan Jansem

芸術学領域群 洋画領域

ジャン・ジャンセン（Jean Jansem/1920年生-2013年没）はアルメニア人として生まれ、ヨーロッパ各地で活動した画家である。バレリーナの後ろ姿を描いたリトグラフで知られるが、人物画を中心に油彩、水彩、パステル等さまざまな形で作品を残し、その卓越したデッサン力を評価された。確実なドローイング、淡さも鮮やかさも自在の色彩、不思議な寂寥感―ジャンセンの絵画表現はいかにして生まれ、どこへ向かい、何をもたらすのか。本論では4章構成にて、ジャンセンの絵画表現について論じ自身の制作との関連性について述べる。

第1章にて作品のモチーフ・作風の変遷について主なものを紹介する。初期は民衆の姿を描くが、その後モチーフはベニス、バレリーナ、マスカレード、宗教行列と変化する。ベニスでは橋や船など生活の痕跡を黒く象り、水辺の表現には数多くの淡い色彩を用いて、その対比と情感豊かな風景を鑑賞者に見せる。バレリーナに対してはその可憐な容姿ではなく、稽古の合間に休憩する姿を描く。労苦という影があるからこそ、舞台で彼女たちは輝くのだとジャンセンは考えていた。マスカレードでは題名を伏せてテーマを悟らせない仕掛けをし、登場人物の真の姿の描写を鑑賞者に任せた。鑑賞者が仮面の下の本性を推理する時、露になるのは他でもない鑑賞者自身の内面であるかのようだ。宗教行列に多く描かれる老人や女性、子供などのモチーフの数々は、ジャンセンの「力なき者たちの生きる姿」の表現の集合であり、ひとつの完成形である。

種々の技法による表現にも特徴がある。第2章では、ジャンセンの残した絵画について特に作品数の多い油彩画・版画を中心に、その技法に注目して述べる。油彩画において、初期作品の直線的なタッチと強い陰影は、陰影の現実感に忠実な表現から脱する形で徐々に変化する。ベニス滞在以降、淡い色と滑らかな筆致によって色相を接続し、水面の上の湿度を思わせる描写はバレリーナのシリーズに続いて、画面上に配置された七色の色相を衣装の白色が自然に繋ぐようになる。マスカレードでは七色の色彩によって個性付けられた華やかな仮面の人物たちに影が落ち、鮮やかな七色の色彩と灰がかった暗部との接続と対比がモチーフの二面性を強調する。宗教行列にてタッチがより滑らかになる一方で、淡い色彩の中のドローイングが存在感を増す。各シリーズに特徴的であった描写が、宗教行列の作品の上で共存する。複数のモチーフに共通する特徴にドローイングの線、七色の色彩、物体描写と筆致の連続性がある。明瞭なドローイングはバレリーナのシリーズで色面の区別から解放されて色彩の上を動き回るようになる。モチーフの動態を描き出し、生命感を引き立たせる線描は、モチーフとなる人々の活動を克明に描写することを助ける。七色の色彩もまた作品全般に共通する特徴である。画面の中で最も明度の高いモチーフとそれを囲むような七色の色彩への変化は、明暗の変化を忠実に置き換えている。再現的物体描写と、ペインタリーな描写のふたつを、ジャンセンは油彩作品の中で顕著に連続させながら表現を行う。筆致を大きく残した背景は物質化と彩色の境界であり、再現的描写によって物質化された物体・人体と連続的・段階的に接続されている。彩度の高い背景から白色の筆致の粗密によってモチーフが出現してくるかのような効果は、自ら光り輝いている印象を与える。リトグラフ・銅版画における表現も油彩表現とともに変化していくが明瞭なエッチングの線、白とグレートーンの強いコントラストでモチーフを際立たせる描写は年代を超えたジャンセンの版画表現の特徴である。

技巧と技法を問わずあらわれる表現の特色はすべて「名もなきものたち」の光と影を表現する。第3章では作風とモチーフ・技法の変化に関わらずジャンセンの絵画に共通する表現について、身体の線、光の描写、モチーフの匿名性に注目して表述しその意図について考察する。彼の描く物体の形態のリアリティを支えるのはデッサンの正確な線である。一方で細長い肢体の表現においては写実性から離れることがある。細い身体描写のルーツは初期作品の民衆の描写に見られ、彼らの生活の多くを労働が占めていた貧しい状況があったことを描き出す際に細長い四肢の描写となって作品にあらわれたことを推察させる。その後ジャンセンの描く人間は身分に関係なく細長い肢体をもつ傾向が強く、彼にとって個々人が貧富で大別されず、みな輝かしさ暗さという二面性をもつものととらえていたことを推察させる。光の描写について、ジャンセンは「光と影、生と死は隣り合わせ」と言葉を残す。彼は絵画において彩度の高い色と無彩色、色相の遠い色を頻繁に隣接させ、画面空間上で強い光と影の描写を行い続けている。またモチーフにおいてもバレリーナ、マスカレードと、光と影の二面性を強く意識している。数々のモチーフや技巧を通して、ジャンセンは具象性の表出を嫌う。彼自身が選択したモチーフは個々の顔立ちや個人に特有の性格をそれぞれ区別して描かれず、民衆や労働者の一部として描かれ、各コミュニティの構成員が共通して持つ内面の性質を表現するために描かれている。人々の動態を形作るドローイングの線や、モチーフにスポットを当てる光の描写は、営みを送る人間を固定する外面的要素を排除し内面を描画するための手立てにすぎない。

ジャンセンの表現にヒントを得、これまで筆者が人物表現において注力してきた皮膚表面の凹凸の描写に加え、暗部と明るい部分とのコントラストを細かな筆致による皮膚表面の描写によって段階的に接続させることを試みた。第4章では筆者とジャンセンの表現に見出される関連性について考察するとともに制作のレポートを行った。これまで筆者は人体をモチーフに思念の表現を試みてきた。表現にあたって、手の皺や皮膚の細かな凹凸といった人体の一部を描き出すことに注力した。人体から表情や頭髪を取り払って描くことでその匿名性を高め、手に刻まれた皺やポーズによって、見る者や筆者自身が人物の内面に注目できるようにすることを目標としてきた。匿名性を高めて人物を描写することにジャンセンの絵画表現からヒントを得ることができないかと考えた。研究の中で、これまでの筆者が注力した皮膚表面の凹凸の描写に加え、暗部と明るい部分を描いた上でふたつを細かな筆致による皮膚の表現によって段階的に繋げることで、人物の持つ立体感の再現と臨場感の表現、匿名の人物―固有の名前を持たず筆者自身や鑑賞者の知覚・経験から普遍的な想起をもたらす装置―の表現を図った。

眼差しa
A gaze (a)
118×88cm
水性木版、和紙
2022年

眼差しb
A gaze (b)
118×88cm
水性木版、和紙
2022年

宮本 苑佳
MIYAMOTO Sonoka

色彩の心理効果に関する研究　作品「色の存在」「怠け者」「自画像」及び研究報告書

A study on the psychological effects of color Work “The Existence of Color” “The Sloth” “Self-portrait” with Research Paper

芸術学領域群 日本画領域

「怠け者」“The Sloth” 145.5×178.8cm　雲肌麻紙、墨　2022年1月

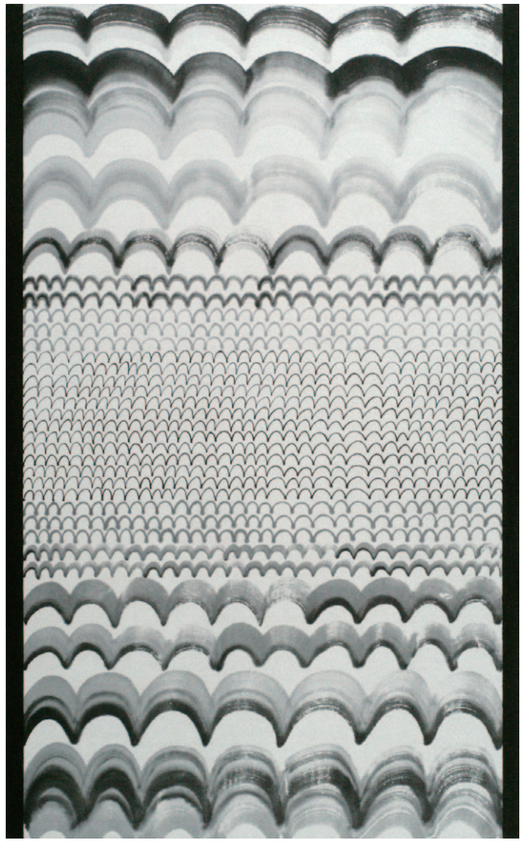
第一章　序論

「色とは何か?」、色については何千年もの間、明らかな答えがなかった。ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）は「色彩論」の中で「色彩とは光と闇によってできあがっている」と唱え、「色とは白と黒の境目に存在する」と主張した。ゲーテは科学的な側面だけではなく人間の感覚的に生じる色についても様々な実験を行い追究した。現在の色彩心理学の先駆けであると考えられている。

絵画の表現は、「何を表すか」という内容の構成力と「どう表すか」という表現技術の両立によって成り立つ。その要素の中でも「色彩」は特に「送り手」と「受け手」の心（心理）に深く関わる重要な部分であると考えられる。しかし、ここで筆者は「色彩表現」がたくみになればなるほど、逆に「何を表すか」という表現の本質が歪められることにはならないだろうかという疑問を抱いた。「色」の解釈は、個人の「嗜好」や「経験」などによっても大きく左右されるものではないだろうか。本研究では、「色彩」と「人間」の関係に関わる一側面としての「色」と「色に対する個人の『感情』」との結びつきについて数量的に分析し究明した。

第二章　先行研究

本研究を行うために参考にした先行研究についてまとめた。一つ目は心理学者のチャールズ・E・オズグッド（Charles Egerton Osgood、1916-1991）が開発した、形容詞を用いて物事のイメージを数値化し、その特徴や対象同士の共通点、相違点を分析する方法、SD（Semantic Differential）法を用いた色彩感情の先行研究について。二つ目は大山ら（1963）と伊藤（2008）の象徴語を用いた色彩象徴の先行研究について。三つ目は伊藤（2008）の色彩好悪の先行研究についてまとめた。



「色の存在」
“The Existence of Color”
145.5×89.4cm
西ノ内和紙、墨
2022年1月

第三章　調査

本研究では色彩感情、色彩好悪、色彩象徴について10～20代の小中高生、大学生、社会人までの男女を対象に調査を行なった。調査は個別に筆者が質疑を行なった。質問内容は先行研究をもとに①一番好きな色、その理由、②一番嫌いな色、その理由、③対となる形容詞を左右に置き、提示する色のイメージを7段階尺度から選ぶ（SD法）、④提示した色を好きな色から順に並べる、⑤14の象徴語から連想する色名（20代のみ）、とした。

第四章　分析と考察

色彩好悪について、一番好きな色とその理由（①）の調査結果から、時代と共に「色＝服装」から色の概念がもっと広い対象に向けられ、「個人の気分を左右するもの」と意識づけられるようになっていることが予想された。理由をカテゴリー分析した結果、10代では「明るく元気が出る色」、20代では「落ち着く色」が最も多くの色の嗜好に関わっていることが分かった。一番嫌いな色とその理由（②）では、理由をカテゴリー分析した結果、伊藤（2008）の結果とほぼ変わらず時代が変わっても嫌いな色に対するイメージの固定化の傾向がみられた。

色彩感情（③）について「色相」、「明度」、「彩度」とSD尺度値との相関を算出した。「色相」との相関の結果では赤に近い色は、興奮した刺激的なイメージを与え、青に近い色は静かで悲しいイメージを与えるという従来の研究や通念と共通する結果となった。「明度」との相関の結果では、12尺度中8尺度が「明度」との「強い、比較的強い相関」を示し、色のイメージの多くが「明度」の影響を受けることが分かった。「彩度」との相関の結果では、彩度が高いほど「派手な」「騒がしい」というイメージが強く、彩度が低いほど「地味な」「つまらない」というイメージが強い傾向にあると言えた。

10代、20代でグループを分け相関を算出した結果では、10代は「明るい」「軽い」ものは「美しい」「安定した」イメージを持っているが、20代は「明るい」「軽い」ものが必ずしも「美しい」「安定した」ものとは結びつかない。また、20代は「軽い」という言葉が「派手な」に近いイメージを持ち、「重い」という言葉が「地味な」という言葉に結びつくことが分かった。色を媒介して言葉のイメージを表す時、「明るい-暗い」「軽い-重い」という言葉は他の尺度とは異なった性質を持ち、物の状態を表すだけでなく多くの意味を含有する言葉であることが分かった。

色彩象徴（⑤）の集計結果において象徴語ごとに最も記載の多かった色を先行研究と比較すると、怒り（赤）、嫉妬（紫）、罪（黒）、永遠（白）、平静（青）、愛（赤）、純潔（白）、不安（灰）、恐怖（黒）の9語が一致し約60年間の中でこれらに対する色のイメージが日本人の通念として存在することが分かった。また他の象徴語についても回答数に違いはあるがほぼ同じ色を示していた。

第五章　結論

様々な色の操作や作用の中で生きている現代の私たちにとって色との関わりは不可欠である。本研究は「色のイメージ」に関するほんの一要因を探ることであった。色彩と絵画の関係についてや、今回、十分でなかった「色のイメージ」と「色相」「明度」「彩度」などの効果も、さらに幅広い条件を考え今後再検討したい。

最上 健
MOGAMI Ken

長谷川昂の木彫作品における鉈彫技法による造形に関する研究　作品「進化と朽滅」及び研究報告書

A study of the formative technique by hatchet in Hasegawa Ko's wooden sculptures　Work: "Evolution and decay" with Research Paper

芸術学領域群 彫塑領域

進化と朽滅
Evolution and decay
H196×W89×D62cm
樟、水干絵具、墨、藍、天然土絵具
2022年

はじめに

彫刻家長谷川昂（1909 〜 2012）は鉈彫と呼ばれる独自の技法を用いて数々の木彫を世に残した。一般的に鉈彫というと10世紀後半から11世紀に制作された丸鑿の彫痕を意図的に全身に残した木彫や、円空（1632 〜 1695）が制作した鉈や鑿跡による大きな面で造形された木彫を指すことが多い。一方、長谷川は鉈を用いて、作品に無数の刻み跡、叩き跡を意図的に残す技法を確立させた。この技法は木彫史の中でも独特な表現の一つであるが、造形的考察はほとんど行われていない。本研究では長谷川の木彫作品を造形要素や精神性等の視点から検証を行っていく。

第一章　長谷川昂の生い立ちと制作活動

長谷川は現在の鴨川市に農家の長男として生まれる。自然豊かな土地で6人兄弟の中に育っているが、妹が幼くして逝去している。この出来事は長谷川の心に打撃を与え、後に《しゃぼん玉》などの作品に反映される。22歳で上京し、佐々木大樹（1889 〜 1978）、内藤伸（1882 〜 1967）の門に入り、本格的に彫刻家への道を歩み始めた。しかし、厳しい修行時代を乗り切り、自分の工房を構え、これからという時に大きな戦争を経験し、この事は、後の作品主題にも反映される。40代後半までは《シャボン玉》のような日常の一面を切り取った作品や着衣の人物、裸婦を主題とした具象彫刻を発表していたが、1959年の個展で鉈彫技法を用いた作品を初めて発表している。この頃から《浄池》のような長谷川の世界観を強く反映させ、それまでの具象彫刻とは異なる造形要素を含む鉈彫木彫を発表するようになる。以降、鉈彫技法を用いた木彫作品を晩年まで制作し続けた。

第二章　技術、彫刻史の中の位置づけ

長谷川は多くの初期作品に、石膏原型を制作して木にその形を移す星取技法を用いた。また、高い木彫技術を持っており、丁寧な鑿跡を残している。鉈彫では、大鉈や小鉈、自作鉈と使い分けながら叩き方にも変化をもたせ、幅広い表現が見られる。そして、美術界が大きく変化している時代の中、長谷川は伝統的な木彫刻の系統に身を置きながらも独自の表現方法で、構造の力強さに重きを置いた彫刻作品を発表した。

第三章　作品主題と精神性

長谷川は表面的な写実や形式的な技術より、「心の表現」を重要視し、その過程で表れる「悩み」が「美しさ」を作る一つの要因であるとした。時間と労力を要する鉈彫り技法がうまれた背景にはこのような「思想」が大きく関わっている。《シャボン玉》、《道》、《夢》、《母子》にみられるように子供や母子が主題に多く取り上げられていることは長谷川の「心」が木彫に表れているからであろう。身近な幼い命を失う二つの経験は少なからず、作品主題にも反映された。宗教彫刻においても、伝統とは技術を継承するだけではなく「情熱」、「心」を引き継ぐことが重要であると考え、仏像制作にも自らの「心」を大事にした。そして、独自の思想で宗教を解釈し、作品に反映させた。

第四章　彫刻の要素

長谷川は「木」を自分と同等の存在として「対話」しながら制作を進めた。「木」の持っている特徴を生かすことは重要な造形要素の一つとなり、テクスチャーや構成、構造にも反映された。さらに、「線」を重要な造形要素として考え、感情など様々な情報を表現しようとした。長谷川の作品の「線」はそれまでの伝統的な木彫の持つ2次元的な「線」とは異なった性質を持ち、3次元的な「空間」の中で鉈による不規則な叩き跡の集合により形成される無数の「面」「塊」から生まれる「線」であり、「構成」「調和」「動勢」「量感」を豊にしている。また、鉈彫はその刻み跡により「空間」の中で「線」や「面」「量感」を単純化、抽象化することで、自然の形態からの抽出作業を行い、「視覚」だけでなく、「触覚」などの五感を通じた感覚を鑑賞者に与える効果を生み出している。構造や彫刻の要素の探求を推し進めながらも、「精神」や「心」をより深く彫刻に反映させることを重要視し、そのバランスの中で形態の抽象化を進めた。その過程では、古代彫刻や飛鳥時代から制作されてきた仏像の研究だけではなく、新時代の彫刻に対して独自の探究が十分になされている。

第五章　鉈彫技法による木彫の制作

著者は日本の伝統的な木彫技術と鉈彫技法を作品に同時に取り入れ、視覚効果を検証した。木取では木の形を生かすように基準を設定した。構造と量の配置を明確にすることを優先して、中彫まで進めた。鉈彫を施さない箇所は鑿や彫刻刀を用いて細部を明確にした。本作品では木目に対し垂直に近い角度で刃を打ち込んでいく鉈彫の表現方法を主に行った。

おわりに

著者は、鉈彫技法による造形を表面のテクスチャーのみに絞って考えて制作していたが、立体感、素材感が乏しいことに気づいた。そこで、鉈彫りの要領で木彫表面を刻みながら立体的に造形をする方法を試みた。また、同時に鉈で刻む角度、強さに変化をつけた。この結果、鉈彫り跡に立体感、素材感が生まれ、全体の単調さが改善された。このことは、鉈で材木の繊維を切りながら刻むことにより生まれる不規則な造形の効果も影響していると考えられる。長谷川は、構造を決める段階より鉈を用いて不規則性を伴った「線」を造形することにより、「量感」「動性」をより際立たせ、その結果、鉈彫はより「触覚」などの五感に訴える効果を生み出している。研究を通して、構造を決める初期段階での不規則性を含む鉈彫による造形が、視覚効果に大きく影響していることが見いだせた。木を叩く鉈の角度や深さ、間隔、材木の種類、彩色材料を変化させればより新しい表現を可能にすることが期待できる。

デザイン学領域群

Design

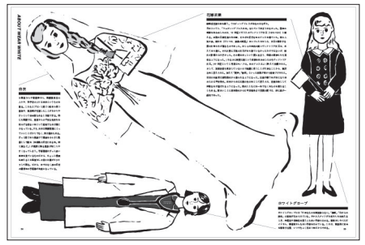
Constructive Art	構成
Plastic Art & Mixed Media	総合造形
Craft	クラフト
Visual Design	ビジュアルデザイン
Information Design	情報デザイン
Product Design	プロダクトデザイン
Environmental Design	環境デザイン
Architectural Design	建築デザイン

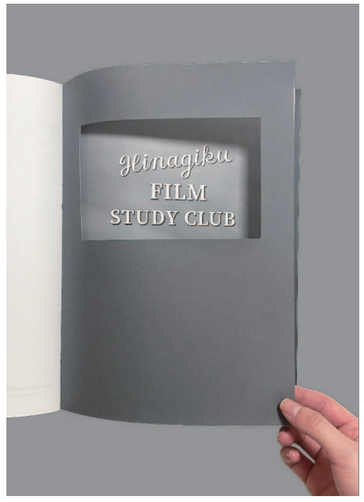
小山 莉瑛子
KOYAMA Rieko

グラフィックデザイナーの自主制作によるカルチャーメディア　作品「Hinagiku」及び研究報告書

Culture media by graphic designer's private work　Work "Hinagiku" with Research Paper

デザイン学領域群 ビジュアルデザイン領域





CULTURE MEDIA Hinagiku ZINE 01
200×270mm
2022年

序章

本論の目的は、アート、デザイン、ファッション、音楽、映画…などといったあらゆるカルチャー諸分野について、ある一つの分野に興味を持ったことをきっかけに異分野へ興味の派生を促すカルチャーメディアを、グラフィックデザイナーの自主制作というスタンスから制作するとどのような表現が可能であるか探ることである。

第1章　グラフィックデザイナーの自主制作

本論における「グラフィックデザイナーの自主制作」の定義に当てはまる事例を見ていくことで、その営みには、①気分転換 ②造形トレーニング ③表現手法の実験 ④認知度の向上 ⑤デザイン哲学の発信 ⑥社会貢献、といった6つの意義があることが分かった。さらに、その表現そのものが「目的」となっているか、あるいは「手段」となっているか、という視点から事例を捉え直すことで、現状よりも表現が「手段」となっている自主制作活動が活発に行われて良いのではないか、という問題提起を行なった。

第2章　カルチャーと異分野への興味派生

カルチャー諸分野への興味派生を促すコンテンツによるメディアの意義を、その重要な歴史や人物と共に説いていった。デ・ステイルをはじめとした芸術運動の発行物、パンク、スケーターカルチャーなどといった特定コミュニティの中で発展を見せたZINE、日本におけるミュージシャンの音楽複合イベント、などといった事象を見ていく中で、興味派生の構図を生み出してきたメディアがカルチャーの発展において多大なる貢献を果たしてきたことが分かった。

第3章　興味派生を生み出すカルチャーメディア —その編集方法論

興味派生を促すコンテンツの編み方について分析を行なった。マガジン、WEBサイト、ラジオ、イベント、美術館・ギャラリー展示、商業施設・ショップ、漫画・小説、動画配信番組、あらゆる形式のメディア事例を参照していくことで、その方法論を見出した。それらは大きく分けると①キーワード設定型 ②構成要素切り取り型 ③共通構造提示型 ④社会的ムーブメント/コミュニティ括り型 ⑤人焦点型 ⑥物理的集合型 ⑦リファレンス・インスピレーション追跡型 の7つの方法論に分類することができた。

第4章　グラフィックデザイナーの自主制作によるメディア

グラフィックデザイナーの自主制作という特殊なスタンスであるからこそ叶うメディアアウトプットの特徴について、事例と共に分析を行なった。その表現特徴としては、①私的なテーマ・コンテンツ ②実験的なデザイン ③強固な世界観の3点が挙げられた。

第5章　考察

興味派生の構図を生み出すことを目指した編集によるコンテンツ、グラフィックデザイナーの自主制作という立場だからこそ可能なアウトプット、これら2つの視点を意識して制作がなされたカルチャーメディアの事例は、少なくとも国内ではほとんど見受けられず、開拓していくことには大変意義があることといえる。そして、そのような制作を行うことは、これから必要とされるであろう「自発的に考え社会へ向けて行動する」デザイナー像の実現ともなる。また、グラフィックデザイナーの自主制作によるメディアは、紙媒体による事例が圧倒的に多いという気づきも得た。様々な媒体形式を複合的に用いることで、より新しいメディア表現を模索できるはずである。

第6章　制作活動報告書

今回メディアを制作するにあたって、自身に最も馴染みがあり制作をしやすいという理由から、紙媒体冊子を中心に制作した。加えて、音楽ストリーミングサービスを用いたプレイリストの公開、宣伝ツールとしての告知ポスターの展開などをしている。コンテンツの編み方については、第3章を元に①キーワード設定型をとった。これは、研究により明確になった7つの方法論のうち最も単純で編集しやすい上に、編集者によって内容に大きく違いを出せる方法論であったためである。

アウトプットについては、グラフィックデザイナーの自主制作であるからこその表現として第4章で述べた3点をそれぞれ実現させた。①私的なテーマ・コンテンツについては、プライベートな人とのやりとりを用いる、自身の考えを掲載する、などによって実現した。②実験的なデザインについては、2種類以上の印刷方法の掛け合わせ、扉や切り抜きの挿入、カードや封筒の貼り付けなどといった仕掛け、複数種類の紙の使用、といったデザインによって実現した。③強固な世界観については、企画・編集・アウトプットまでの一連を全て自身で行うことで、他社に頼む故のコンセプトのブレや齟齬が生まれる心配がない。また、今回はスポンサーや広告を入れていないためにそれらへの配慮なく自由な表現ができている。

終章

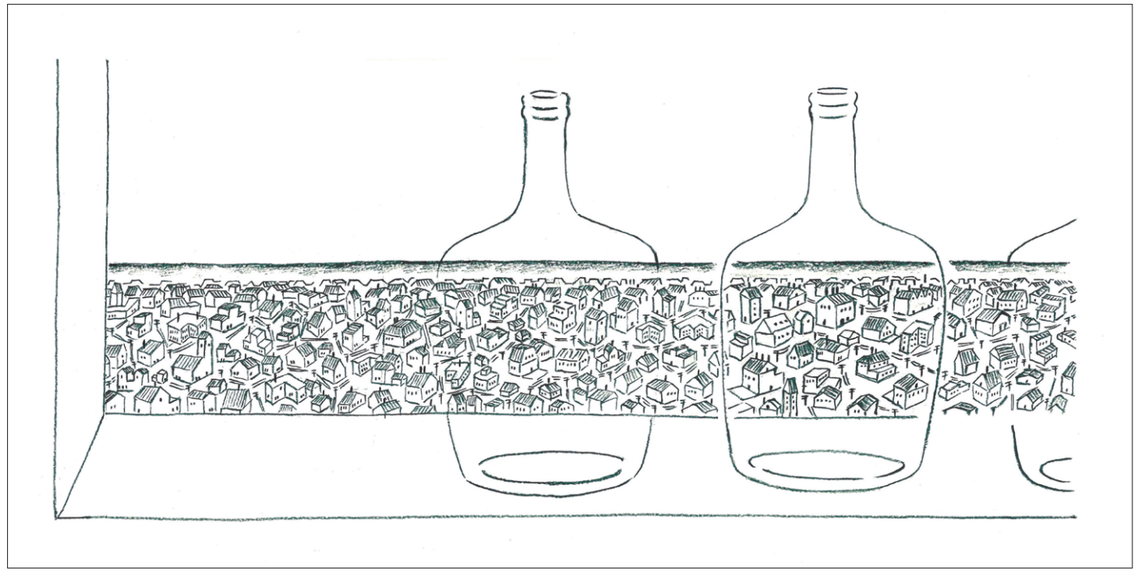
今回の制作を踏まえた上で、これからの課題と展望として三点挙げられる。一つ目には、特定のメディア形式に固執することなくマルチに展開していくこと。二つ目には、流通システムや販売方法などについて、ターゲットやコンセプトにあったその振る舞い方を考えること。三つ目には、展開規模を考えること。個人的な制作物であるほど、展開規模はどうしても小さなものとなってしまう一方で、良い意味で普遍性のない内容づくりや細部まで行き届いたビジュアルコントロールが可能となる。これらのバランスについて落とし所を模索していくべきである。これらを踏まえることで、唯一無二のカルチャーメディアとして新しい表現が実現していくであろう。

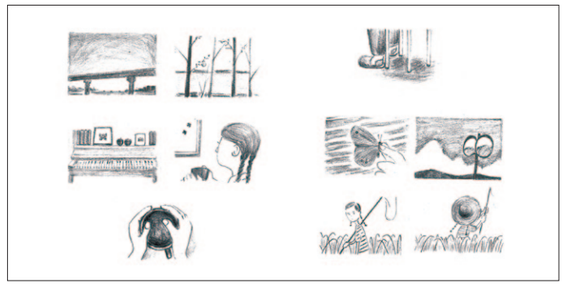
中峯 大樹
NAKAMINE Daiki

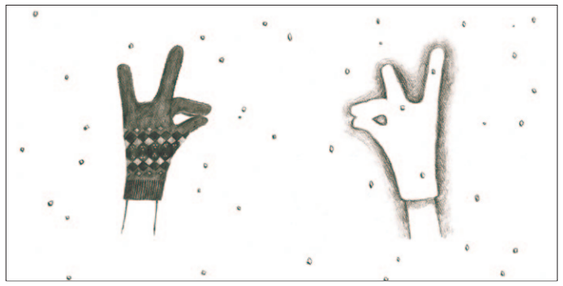
ジャン・ミシェル・フォロンのポスター作品に見られる詩的表現の研究　作品「絵はうたへ うたは絵へ」及び研究報告書

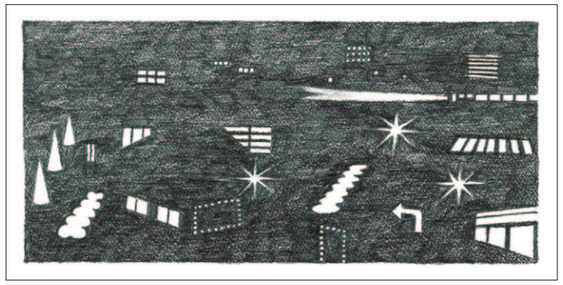
Study of poetic expression of Jean-Michel Folon's poster work　Work "Illustrations become poems, poems become illustrations" with Research Report

デザイン学領域群 ビジュアルデザイン領域









絵はうたへ うたは絵へ
170mm×340mm
鉛筆2021

はじめに

本稿はベルギー出身の作家であるジャン・ミシェル・フォロン(Jean-Michel Folon, 1934-2005)のポスター作品を取りあげそこに見られる「詩的表現」について記述するものである。今日のイラストレーション表現は様々なメディアや手法によって成り立っているが、そのコミュニケーションのあり方が論理的に言及される状況は少ない。フォロンは出身国のベルギー国内で優れた作家として知られ、また国際的にも評価を集めたがその作品はしばしば「詩的」と評される。記号的なモチーフを視覚的に組み合わせるフォロンの表現の特徴が「詩的表現」にあるとすれば、それはポスターというメディアの上でどのような効果を持つのだろうか。フォロンのポスターが発信するメッセージが社会の中でどのような役割を担っていたか明らかにすることが本研究の主な目的である。また、イラストレーションによる「詩的表現」が持つ効果を再確認するため、得られた知見をもとに詩的な意味の広がりをつくるイラストレーションの制作を目指す。

第1章　歴史的背景

この章では1960-70年代に見られた、フォロンの活動の背景となるフランスとアメリカの広告業界の状況を概観する。フランスで現代的な作家として評価を集めていたフォロンは文化的な主題を持ったポスターを多く描いた。その周囲ではアメリカ企業に影響を受けた広告代理店が台頭しており、顧客のニーズを分析する市場調査やアートディレクターを筆頭に置く集団制作方式が重要視されていた。それらは個人の創作意欲を重視したポスター作家らとは相容れず、ポスターの制作方式が二分される状況が作られていく。さらに、広告代理店の影響が及ばなかった文化的な主題をもつポスターは、個人の創作意欲を重視したポスター作家らの表現を活かす仕事場として求められていった。フォロンが文化的な主題をもつポスターを多く描いた理由のひとつには、保守的、合理的なデザインの表現様式とは距離をおくことで作品に独自の表現を反映する意図があったためと考えられる。

第2章　ポスターの分析

この章ではフォロンのポスターを取り上げ、そこに表現されたメッセージについて考察する。調査対象としたポスター105作品を主題の性質ごとに整理し、「映画・演劇」、「個展・展覧会」、「芸術祭」、「美術館」、「人権・政治・環境・スポーツ」、「商業広告」、「その他」の7つのカテゴリに分け分類した。イラストレーションのモチーフに着目すると、記号的なイメージがかけあわされ、主題に関連するメッセージを作っていることがわかる。ポスターは図像と言葉をひとつの意味に結びつけることで機能するが、フォロンは合理的な手法に拘らず自由かつ実験的な手法でその主題を表現している。また彼のポスターが国際的な人権団体の活動や、企業理念を広めるために採用されていた事実から、そこでは合理的な手法よりもむしろ彼独自のスタイルによる表現の自由さが求められていたことがわかる。

第3章　詩的表現

この章では文学的な詩の構造を見ながら「詩的表現」について考察していく。フォロンの表現は記号的なモチーフを組み合わせることで新たな意味を作っており、文学的な詩にあるような構造を持っていた。また、グラデーションによる表現は空間的な広がりや、鑑賞者の想像を育むような寛容さを作り、余白による表現は図像と言葉といった異なる要素間の自由な関係、イラストレーションとその外部の調和をつくっている。こうした寛容さや、自由さ、大らかさをつくる手法は鑑賞者にポスターの視覚的な解釈の余地を生じさせる。「詩的表現」は記号の新鮮な結びつきによる詩的構造と、前述した解釈の余地によって成立していると考えられる。また、「詩的表現」は特に人権、政治、環境といった、紙面上の情報だけでは説明不足になりかねない主題の上で重要な働きを持つと考えられる。「詩的表現」がつくる意味の広がりは、複合的に絡み合あう社会の問題について思考を巡らす場合にも、幅広い視野や価値観を持つことを促してくれるものだからだ。

第4章　短歌とイラストレーションを用いた詩的表現

この章ではここまでの考察を踏まえつつ、短歌による詩歌の形式をもとに詩的な意味の広がりをつくるイラストレーションを制作する。短歌は日本古来の詩歌の形式のひとつであるが、限られた語数による言葉の繋がりには偶発的な意味の広がりが生まれることがある。この作用を用いてイラストレーションを制作することで詩的構造をもつ記号の組み合わせをつくる。また余白による表現によって視覚的な解釈の余地をつくり、詩的な意味の広がりを持つイラストレーションの制作を目指す。自作は結果的に短歌による言葉とイラストレーションの関係性が不明瞭のままであることは否めず、その意図を十分に表現するには至らなかった。フォロンのイラストレーションに見られた「詩的表現」は社会に潜む様々な問題を明らかにするため意図されていたはずだ。今作では作品が個人の感覚のみを拠り所にしたことでメッセージの内容も矮小化してしまったと考えられる。

おわりに

フォロンのポスターに見られる「詩的表現」は当時流行していた合理的な手法から距離をとる、作家個人の創作意欲や倫理観に支えられたものだった。そこに見られる記号的なモチーフの組み合わせや、色彩のグラデーション、余白による表現は鑑賞者に解釈を委ね、複合的に絡み合あう社会の問題についても様々な視点が得られる意味の広がりをつくっていた。今後の課題として、より社会的に意義のある作品制作を目指すことで「詩的表現」がイラストレーションのメッセージを伝達する助けとなるはずだ。

菅野 優樹
KANNO Yuki

分譲マンションの管理体制が中古取引の価格構造に与える影響に関する研究　―不動産データの回帰分析に基づいて―

Research on the impact of the condominium management system on the price structure of pre-owned transactions –Based on regression analysis of real estate data–

デザイン学領域群 建築デザイン領域

第一章　序論

近年、維持管理が適正に行われないまま放置され管理不全な状態になっている空き家やマンション等が増加することが危惧されている。管理が不全となったマンションは周辺地域に防災性防犯性や生活環境の悪化等の様々な影響を与えている事例の報道もある。管理不全マンションは周辺地価の相場を割り込み、取引困難な負債的扱いになり、社会問題化する恐れがある。早期に管理体制の適正化や建て替え組合の想起が求められる。そのため管理の適正化や建て替え促進方策などが進められているところである。

2022年4月に「マンションの管理の適正化の推進を図るための基本的な方針」が施行される。また同時にマンション管理計画認定制度が施行される。今まで管理に対する基準や目標は明確にはなかった。この改正により管理組合が目標とすべき基準を設けることとなり達成した場合、管理計画認定が受けられ、市場評価につながるという。しかし、市場で評価される質の高いマンション管理とはどのようなものかは詳細に明記されていない。そこで管理に関わる数値化可能なデータを用いて市場価格への影響を説明すること、すなわち管理と市場評価を定量的に結びつけることは必要であると考えられる。

本研究ではヘドニックアプローチの概念に基づき、中古分譲マンションの管理体制が市場価格およびその変化に与える影響について推定することを目的とする。客観性のある不動産取引データにより、簡易に適正な管理費を算定し、適切な管理体制の可能性を探る。ここでいう適正とはマンションが市場に評価されている状態、すなわち取引価格が維持、もしくは上昇している状態を指す。市場に評価されているマンションの管理体制の状態を定量的に示すことを目的とする。

分譲マンションの現状を以下に述べる。図1のように取引時の築年月と成約価格をプロットすると点が雲のように分布する。全体としては築年月を経るごとに価格が下がることが見受けられる。一方、個々の物件に着目すると、図1のように上位の価格帯に位置し、かつ価格が上昇しているものがある。しかし中には下位の価格帯に位置し、かつ価格変化が少ないものもある。このように価格変化が様々である理由には適切な管理体制が行われているかどうかといえる可能性がある。

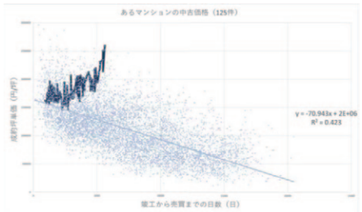


図1　築年月と成約価格

第二章　研究室対象地

本研究では大和ライフネクスト株式会社が管理物件を保有する埼玉県K市、東京都M区、S区を対象とする。データ数が多く、地価の変動が小さい埼玉県K市を中心に本研究では分析を進めていく。

埼玉県K市について図2のように個々の物件の価格変化の軌跡をプロットすると、様子は様々であり、全体としては上昇していることがわかる。次に管理物件に着目する、図3のように価格変化をプロットすると価格が上昇しているようにみられる。しかし図4のように偏差値変化をプロットすると、相対的に高価格帯に位置していたものが、少し下落していることがわかる。これは地価の変化を取り除き、マンション単体の属性による価格変化を表しているといえ、絶対的な価格と相対的な偏差値の両方の変化を分析する必要がうかがえる。

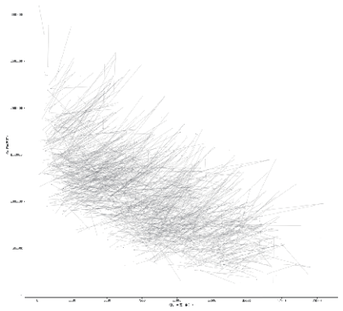


図2　価格変化の軌跡

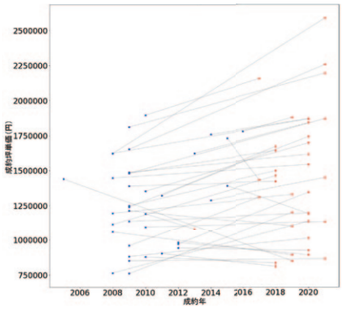


図3　管理物件の価格変化

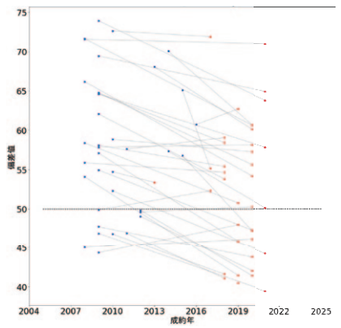


図4　管理物件の偏差値変化

第三章　分析概要

分析としては住宅の価格を目的変数、管理体制やマンション属性および周辺環境の状況を説明変数として、ヘドニックアプローチの概念に基づいて重回帰分析を行う。用いた変数は以下の表に示す。

解析にはExcel、JMPおよびscikit-learnを用いる。本研究で用いたモデルは以下の式の通りである。

$$P = a_0 + a_1 z_1 + \cdots + a_n z_n + u$$

P：目的変数
$a_0, \cdots, a_n$：係数パラメータ
$z_1, \cdots, z_n$：説明変数
u：誤差

目的変数（単位）	算出方法
最初の成約坪単価（円/坪）	データ上の最後の成約坪単価
最後の成約坪単価（円/坪）	データ上の最後の成約坪単価
平均坪単価（円/坪）	全ての成約坪単価の平均
成約坪単価差（円/坪）	データ中の最初と最後の成約坪単価の差
成約坪単価差毎年（円/坪・年）	データ中の最初と最後の成約坪単価の差を、成約年の差で割る
傾き（円/坪・日）	全ての成約坪単価の回帰直線の回帰係数
最初の偏差値	データ上の最初の成約坪単価を、成約年で比較した偏差値に変換
最後の偏差値	データ上の最後の成約坪単価を、成約年で比較した偏差値に変換
偏差値の差	成約年で比較した、最初と最後の成約坪単価の偏差値の差を、成約年の差で割る

説明変数（単位）	算出方法
管理費単価（円/坪・年）	各マンションの年額の管理費を専有面積で割ったもの
積立金単価（円/坪・年）	各マンションの年額の管理費を専有面積で割ったもの
清掃費単価（円/坪・年）	各マンションの年額の清掃関連費を棟の総専有面積で割ったもの
決議数毎年（件/坪・年）	各マンションの総会決議案の題目の数の合計を管理年数で割ったもの
管理組合運営費単価（円/坪・年）	各マンションの年額の管理組合運営費を棟の総専有面積で割ったもの
積立金未収金単価（円/坪・年）	各マンションの年額の積立金未収金を棟の総専有面積で割ったもの
管理費未収金単価（円/坪・年）	各マンションの年額の管理費未収金単価を棟の総専有面積で割ったもの
次期繰越積立金単価（円/坪・年）	各マンションの年額の次期繰越積立金を棟の総専有面積で割ったもの
賃貸率	賃貸中もしくは空室の部屋数を棟の

説明変数（単位）	算出方法
lat	各マンションの緯度
ing	各マンションの経度
竣工年	各マンションの竣工年
建物階数	各マンションの建物階数
管理戸数	各マンションの大和ライフネクスト株式会社が管理する戸数
管理年数	各マンションの大和ライフネクスト株式会社が管理した年数
総有面積	各マンションの総有面積
件数	各マンションのデータ上の総取引件数
距離	各マンションから最近傍公示地価との距離
地価	各マンションからの最近傍公示地価でデータ上最後のもの

第四章　単回帰分析結果

外れ値削除後のK市の単回帰分析結果を図5に示す。管理組合運営費と賃貸率は価格変化にプラス、評価ポイントは平均坪単価にプラス、決議数と修繕費は川口ではプラスだが、目黒渋谷ではマイナスの影響を与えた。

第五章　重回帰分析結果

管理体制のみを説明変数として、傾きを目的変数として分析を行った結果を図6に示す。負の影響に関しては管理費未収金が大きい。正の影響は管理組合運営費がとくに大きく、ついで清掃費が大きい。

第六章　結論

本研究では、ヘドニックアプローチの概念に基づき、中古分譲マンションの管理体制が市場価格およびその変化に与える影響について推定を行った。判明した内容を以下にまとめる。

（イ）管理組合運営費、賃貸率、清掃費は傾き、成約坪単価差とプラスの相関が見られ、価格上昇に関連が認められた。

（ロ）等級評価制度は平均坪単価や最後の偏差値にプラスの相関が見られ、価格帯の位置付けに関連が見られた。

（ハ）積立金単価、管理費未収金単価は傾き、平均坪単価とマイナスの相関が見られ、価格下落および価格帯の位置付けに関連が見られた。

（ニ）成約坪単価差と傾きのモデルには管理組合運営費、清掃費がプラスの係数で組み込まれ、管理費未収金単価はマイナスの係数で組み込まれた。これら管理体制の変数は価格変化の要因として関連が見られた。

（ホ）偏差値の差のモデルには等級評価制度と賃貸率がプラスの係数で組み込まれた。これら管理体制の変数は他物件と差をつける要因として関連が見られた。

（ヘ）平均坪単価のモデルには管理費、管理組合運営費、賃貸率がプラスの係数で組み込まれ、管理費未収金単価はマイナスの係数で組み込まれた。これら管理体制の変数は価格帯の位置付けに関連が見られた。

以上のことから、ある時点での市場評価価格を決定づける可能性があることは、管理組合運営費、管理費、等級評価を上げることと、管理費未収金を減らすことがある。ある期間にわたって市場評価価格を上昇させる可能性があることは、管理組合運営費、賃貸率、清掃費を上げることと、管理費未収金を減らすことがある。またさらにある期間にわたって他物件と比べて相対的に市場評価価格を上昇させる可能性があることは、賃貸率、修繕費、等級評価を上げることがある。

このことからマンションの管理体制は価格に影響を与え、等級評価制度は中古分譲マンション市場の健全化に寄与すると考えられる。

	最初の成約坪単価	最後の成約坪単価	平均坪単価	成約坪単価差	成約坪単価差毎年	成約坪単価比毎年	傾き	最初の偏差値	最後の偏差値	偏差値の差
管理費単価		0.0705	0.1170	0.0472	0.0916	0.2017	-0.2637	0.0039	0.0812	0.1711
積立金単価	0.6675	0.5686	0.6394	0.0925	0.1843	0.3641	-0.5148	-0.6205	-0.5452	0.1944
清掃費単価	-0.0456	-0.0241	-0.1464	0.0184	0.0762	0.1760	0.3083	-0.0058	-0.0121	-0.0850
決議数毎年	0.3094	0.3861	0.3899	0.2628	0.2866	0.9217	0.2364	0.3611	0.3212	-0.0602
管理組合運営費単価	0.1504	0.3593	0.2714	0.4086	0.3528	-0.1332	0.4011	0.2087	0.3099	0.1266
積立金未収金単価	0.1931	0.3649	0.3163	0.3687	0.8512	0.1515	-0.2228	0.2623	0.3193	0.0694
管理費未収金単価	-0.5168	-0.5193	-0.5819	-0.3479	-0.3960	-0.0704	-0.4431	-0.5148	-0.5308	-0.0622
次期繰越積立金単価	-0.0238	0.1970	0.1106	0.3462	0.3026	-0.0333	0.2212	0.0505	0.1339	0.0823
賃貸率	-0.0767	0.1553	0.0328	0.3275	0.2610	0.0800	0.2086	-0.0197	0.1431	0.2136
修繕費単価	-0.5190	-0.5686	-0.4601	0.0283	-0.1101	-0.2547	-0.2403	-0.4110	-0.3207	0.1206
修繕支出総額単価	-0.2225	-0.0716	-0.1473	0.1398	0.1303	-0.1110	0.1215	-0.1757	-0.1226	0.0616
総計	0.2084	0.2001	0.2168	0.0844	0.0475	0.9278	0.0787	0.1938	0.2476	0.1772
修繕支出総額の使用率	-0.2329	0.1734	0.1447	0.0095	-0.1309	0.9457	-0.4364	-0.1897	-0.1092	0.1409

図5　単回帰分析結果

項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob>|t|)	VIF
切片	42.326578	15.15059	2.79	0.0089*	.
総計	0.0120078	0.004685	2.56	0.0155*	1.0858525
竣工年	-0.021888	0.007611	-2.88	0.0072*	1.2295863
件数	-0.032989	0.013737	-2.40	0.0225*	1.0949659
地価	1.5016e-7	4.354e-8	3.45	0.0016*	1.1052059
R2乗					0.58331

図6　重回帰分析結果

博士前期課程芸術専攻 修士論文梗概集

発行日	令和4年3月25日
編集	筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻カリキュラム委員会
発行	筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻
写真撮影	鷺野谷秀夫
デザイン	田中佐代子
印刷	松枝印刷株式会社

The Synopses of Master's Theses, Master's Program in Art and Design

Date of Issue	March 25th 2022
Editing	Curriculum Committee of Master's Program in Art and Design, University of Tsukuba
Publishing	Master's Program in Art and Design, University of Tsukuba
Photograph	SAGINOYA Hideo
Design	TANAKA Sayoko
Printing	Matsueda Printing Co., Ltd

筑波大学大学院
人間総合科学研究科
博士前期課程
芸術専攻

芸術学領域群

美術史
芸術支援
洋画
日本画
彫塑
書

デザイン学領域群

構成
総合造形
クラフト
ビジュアルデザイン
情報デザイン
プロダクトデザイン
環境デザイン
建築デザイン